

# 夏みかん

「無情と決死」

ついに起きてしまった。とてつもない爆発だった。何人が生きているのか。うちの人は、父ちゃん、母ちゃんは、だれもが家族の無事を祈った。つるあせり、いらだち。救助も命がけだった。



↑昇降口から見上げた豎坑棚。ここから坑底までは地下およそ270mもあった。234mの福岡タワーより36mも高い位置から夏みかんが投下されたことになる。

## すぐる思い

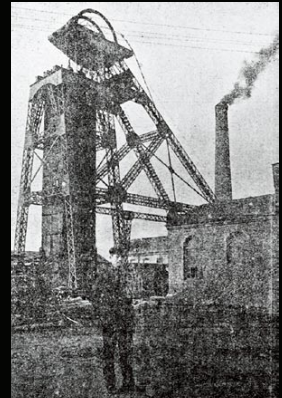
「見えない坑底に非常のあせり」

大非常に直面した坑長の吉澤一磨は、捲揚場付近に対策本部を設置し、ひたすら事態の収拾にあたりました。

まず、なによりの急務は、爆発による坑内の火災をおさめることでした。吉澤は排気坑を密封して火を消し止めた後、巨大な扇風機の回転数を最大に上げて、煙を外に出します。噴煙がようやく見えなくなつたのは、爆発後5時間を経た午後2時半ごろ。その間、昇降機が修繕されました。

昇降機を降ろす前の、その時です。大量の「夏みかん」が次々と坑内へと投げ込まれました。夏みかんの酸でガスを中和させようとしたのです。このため商店や農家からは、保存用の夏みかんが一つ残らずかき集められました。

ガスと中和させるために投下した夏みかん。しかし有効な化学反応のない、無情な行為だった。



←救助入坑の前、意を決して坑口のそばに立つ池田亀三郎坑内主任。写真／福岡日日新聞（西日本新聞社の前身）

## 九人の決死隊

救いの手を届かすに



↓水でぬらしたミノやムシロで身を包み決死の入坑を図る。写真／方城町と炭鉱

「決死隊」を募ったところ、数十人が名乗り出ます。午後1時、選抜された9人の決死隊は、夏みかんを口にくわえ、鼻で息をしながら、まだ薄煙をほく坑口から降りていきました。しかし、充滿するガスで9人はまもなく窒息。地上に運ばれて手当てを受けますが、そのうち5人が命を落としてしまいました。

煙がおさまった午後2時半ごろ、決死隊に次ぐ「捜索隊」が送り込まれます。しかし豎坑の破損がひどく、坑底まであと6〜7メートルのところ昇降機が停止。隊員は助けを求める生存者の声を真下で聞きつつも、引きあげざるをえませんでした。坑底付近の補修は遅れ、やがて用意されたハンゴでどうにか坑底に達します。

そこで、吉澤坑長は夜7時すぎ、池田主任をはじめ技師や医師をしたがえ、夏みかんをそれぞれ口にくわえて入坑します。一行には、福岡鉱務署の目黒技師も加わりました。坑底に達した彼らは、そこで想像を絶する光景を目にします。炭



↑方城大非常の遺体搬出の様子。事故当日の12月15日午後4時に1人目の遺体が上がった。写真／福岡日日新聞（西日本新聞社の前身）

夏みかんを口に決死の入坑。救助の手は、なすすべもなく絶望のふちに立たされた。



レンガ塀が衝撃で壊れ、坑木が噴き上げられた坑口（写真左）。事務所前には犠牲者氏名の揭示場が設けられた（写真上）。写真／福岡日日新聞（西日本新聞社の前身）

## 炭鉱時代の格差 我部堂と百円坂

犠牲者の遺体は地元の人は土葬で、遠方からの出稼ぎの人は火葬にされました。火葬場は「我部堂」の裏と、今はない「河淵池」。我部堂の裏には幅2メートルの細長い溝が掘られ、それに沿った4本のレールの上で、棺が石炭を燃料に焼かれたといえます。



16歳ほどの若い修験僧が厳しい修行で亡くなった場所と伝わる「我部堂」。地域交流センターの裏側にあたる。

坑夫の葬儀に比べ、炭鉱職員の社葬は盛大なものでした。花輪が職員住宅街のあった西端売 現購売バス停付近 から事務所まで連なつたといえます。この坂は職員の高給取りを指して「百円坂」と呼ばれてました。坑夫が休みなしに働いて月給20円ほどの時代でした。



九州日立マクセルや赤レンガ記念館に続く現在の百円坂。桜並木の名所として知られる。

**インタビュー**

夏みかん投入を目撃した池本喜代蔵さんの子

**池本 正義さん**  
(伊方 局通り)

「いったい、あれだけの夏みかんを短い時間でどこから集めたやろうか」と父が話していました。とにかく、とてつもない量の夏みかんが、坑口から投げ込まれたようです。遺体があがる現場は、思わず目を背けてしまうような悲惨な状況だったと、父から聞いています。